

『実験植物との半世紀』

はじめに

この度、帝塚山学園人間環境科学研究所「人間環境科学」別巻として私の随想集を刊行して下さることになり、これに勝る喜びはありません。人間環境科学研究所に厚く御礼申し上げます。

思えば大学の卒業研究以来、私と付き合ってくれ、私の大切な生き甲斐になってくれた実験植物たちは数多くあります。種類も多く、数えてみますと以下のようになります：タマネギ（鱗茎）、オートムギ（幼葉鞘）、コムギ（根）、キクイモ（塊茎）、エンドウ（上胚軸）、アズキ（上胚軸）、オオムギ（幼葉鞘）、イネ（幼葉鞘）、キュウリ（下胚軸）、トウモロコシ（幼葉鞘）、セイヨウカラシナ（根）、ヒナゲシ（花茎）、ホテイアオイ（花茎）、など。これらの大部分は人間の食用になるものです。主として暗室の中で私は彼等と仕事をしましたが、成長の仕組みを知るために私に切り刻まれたこれらの植物たちは人間に食べられるのと、こうして実験に使われるのとどちらが幸福だろうか等と、いつも考えながら実験したものです。実験に使われる植物は、食用になるものに比べると、ごく少数の選り抜かれたもので、科学の進歩に寄与しているのだから彼等ももってめいすべし、だろうと勝手に思ってきました。

こうした私の植物との研究生活を可能にして下さった大学の恩師、先輩、大阪市大の同僚、大学院学生諸君、国の内外から一緒に研究するために来てくれた方々、帝塚山短大の同僚、助手のみなさん、これらの学校で勤務の上、援助をして下さった図書館や事務の方々には厚く御礼申し上げます。また、私の植物との付き合いにあたり、多くのことを教えてくださり、有形無形に支えて下さった小学校、中学校、高等学校の恩師、友人、欠点の多い私とご交誼くださった先輩、友人の皆さん、そして家族、とくに妻に、古希を迎えたこの機会に感謝します。今後は、万博公園の日本庭園で太陽の光を受けてすくすくと成長しつつある野外に育つ自然の植物たちを眺めながら彼らと付き合いたいと考えて居ります。

平成10年6月

増 田 芳 雄